

夏祭りでラッパ飲みできる人気飲物・ラムネ

ーガスの圧力でガラス玉を押し上げて密封ー

■ラムネの歴史

ラムネは1843年英国人ハイラム・ゴットにより開発された。わが国への渡来は幕末のペリー来航時に清涼飲料が持ち込まれた。和製用語「ラムネ」は明治初期には、すでに使われていた。ヨーロッパでは炭酸レモネードが流行していた。レモネードを早口で繰り返すとラムネという音に聞こえて用いられたらしい。日本人が初めて造ったのは長崎の藤瀬半兵衛で1865(慶応元)年であるが諸説ある。



ハミルトン瓶とコルク 出典：『ソーダと炭酸水の歴史』

■ラムネの瓶とガラス玉

最初のラムネは瓶(びん)の中の炭酸ガスを逃がさないため、栓のコルクを濡れた状態を保ち、直立しない底の丸い瓶を考案した。これを「ハミルトン瓶」といい、日本では「きゅうり瓶」と呼ばれた。玉入り瓶の発明は1872(明治5)年イギリスのハイラム・ゴットである。瓶の中にガラス玉をガスの圧力で瓶の口部に内側から密封する画期的な方法を考え出した。1886(明治19)年ダン・リーランスが、ハミルトン瓶を改良し、瓶を洗う際邪魔にならないように、肩部に玉寄のくぼみ付けた改良型を発表した。日本に玉入り瓶が輸入されたのは明治20年頃である。玉入り瓶はガラス製造の職人まで驚いた。大阪の徳永玉吉は硝子製造所をつくり瓶の研究のすえ1892(明治25)年の玉入り瓶を完成させて、国産化に成功した。欧米では王冠による密封法が同年に発明されて切り替わり、ハミルトン瓶は廃れていった。インドと日本のラムネだけが玉入り瓶が残されている。



現在販売されているラムネ 筆者蔵

■ラムネのガラス玉の役割

炭酸ガスが飲料水に溶かされ、ガスの圧力によって自然にガラス玉を上へ押し上げて口がふさがれる。玉押し(木製の凸型)でガラス玉を押すと飲料水は吹き溢れるので玉をくぼみに寄せて飲むのがコツである。

■ガラス玉入り瓶製造とビー玉の由来

・最初の製造工程で、ガラスの種を鉄型に挟み込んでから空気を吹き込むと瓶の形ができる。鉄型から出てきた量は冷やされて硝子瓶とな瓶。瓶口は未完成にしてある。ガラス玉(A玉)を常温のまま瓶口から中へ落とし込む。瓶口部だけを50度ほどに加熱して瓶口を少し縮むと玉が飛び出さなくなる。

・玉瓶の玉をマープル・ストッパーと呼んでいた。1925(大正14)年マープルを造る清家直行は、玉を徳永硝子へ納めていた。ラムネの玉瓶に使えるのを「A玉」に、不良品を「B玉」に選り分けた。B玉を玩具問屋街で売られるようになった。玩具のビー玉の名前の由来である。子どもの遊び道具となり普及した。

■ラムネは軍隊でも庶民にも愛された人気飲物

・大正初期の兵隊の給料が1日5銭7厘でラムネを町で買うと5銭であった。軍隊でラムネ製造機を買い自家製造をして2銭で売り、厳しい訓練で兵隊が一番喜び飲物はラムネであった。

・夏の夜店、夏祭り、盆踊り、駄菓子屋などでは、ラムネが水で冷やされて飛ぶように売れた庶民の人気商品でもある。買った人はラッパ飲みをして瓶はその場に返し回収された。今で言う「リターンボトル」であった。ラムネの価格は1957(昭和32)年10円、1980(昭和55)年は100円であった。

■ラムネ生産の最盛期は昭和26~30年

1904(明治37)年、サイダーに王冠瓶が採用された。王冠栓付きはサイダーと呼ばれラムネよりも高価に売れた。1953(同28)年、ラムネは炭酸飲料の60%以上を占める黄金時代は長く続かなくなる。強敵が現れた1961(同36)年舶来のコーラ飲料が輸入自由化され急速に普及し、国産のラムネやサイダーを凌駕していく。



夜店のラムネ売り 出典：『ラムネ Lamune ラムネ』

(大橋公雄)